

リピンとのつながりが深い。はたしてどのような経緯でこのプロジェクトが企画されたのだろうか。主催した日本リザルツの白須紀子代表は次のように語った。

「はじめはレイテ島で復興支援を行っていましたが、状況確認のため、セブ島北部も視察したんです。するとそこには物を乞うする多くの子供たちがいました。ちょうどその頃、セブ島でハーレーの販売をしている五十嵐さんの話を聞いて



このプロジェクトを企画した白須代表（左端）と現地のハーレーツーリングクラブの指揮をとった五十嵐社長（中央）

ていたこともあり、ハーレーが支援物資を届けるというイメージを五十嵐さんに伝え、このプロジェクトを企画しました。私は1991年から骨髓バンクのボランティアを行っていたのですが、その時もハーレーの団体が協力してくれたという経緯もあり、ハーレー乗りはカッコよくて、心が温かいという印象を持っていたのです。その想いも、今回のプロジェクトに影響していると思います」



五十嵐社長もハーレーに乗り、被災地を目指す

当日は五十嵐社長の声掛けにより、物資を積んだトラックと、ハーレーやV-MAXとといった大型バイク約30台が集結。セブ市からクルマでおよそ3時間の距離にある、北部の町・タブエランを目指した。

ハーレーやV-MAXなど、約30台のバイクが集結。タブエランに救援へ

小行政区)のリーダーから、被災状況や不足している物資の説明などが行われた。話によると現在、水の供給システムの90%は回復しているものの、依然としてシェルター(避難場所)や食糧、薬が不足。徐々に支援物資も少なくなっているという。畑が壊滅した



タブエランの町並み。建物や道路の復旧はほとんど完了しているが、いまだに物資は不足している

ことで、主要産業であった農業での収入が無くなり、生計手段を失った住民が多いことも、また支援が必要な理由の一つだ。バランガイのリーダーは、農業による損失はおよそ3億ペソ。日本円にして約6億9000万円のダメージがあっただろう、と深刻な表情で話していた。

打ち合わせを終えると、タブエランにある12の村で、いよいよポカリスエットの配布がスタート。住民は予め配られていた交換チケットを手に、長蛇の列を作った。ハーレーオーナーズグループのメンバーも配布活動を手伝い、彼らから物資を受け取った住民



状況説明をするバランガイ(最小行政区)のリーダー



昨年11月、過去最悪とも言われる台風被害を受けたフィリピン。最も被害の大きかったレイテ島をはじめ、現在も各地で復興作業が続けられている。そんな中、NGO法人・日本リザルツは、日本とフィリピン両国で二輪販売および貿易業を営む、㈱ジェイ・ピートレーディングほか数社と協力し、大塚製薬から提供を受けたポカリスエット2万本を被災地に配布する「ポカリスエット&ハーレープロジェクト」を実施した。

大型バイクが復興支援にひと役 飲料2万本を台風被災者に提供

昨年11月にフィリピンを襲った台風30号(フィリピン名…ヨランダ)。死傷者は3万3000人、避難した被災者は390万人にもものほり、台風が多いフィリピンでも過去最悪レベルの被害となった。現地では、今もなお復興作業が続けられており、物資も不足している状態だ。

そんな中、NGO法人・日本リザルツが、レイテ・セブ島緊急支援プロジェクトの一環として、2月16日に「ポカリスエット&ハーレープロジェクト」を実施した。同プロジェクトは、大塚製薬から支援物資として提供を受けたポカリスエット2万本を、ハーレーオーナーズグループのメンバーが、セブ島北部に赴き、配布を手伝うというものである。



このグループを招集し、共に配布活動に参加したが、日本とフィリピン両国で、ハーレーを中心とした二輪販売および貿易業を営んでいる、株式会社ジェイ・ピートレーディングの五十嵐隆博社長だ。同氏はセブ市内で日本の中古品を取り扱ったりサイクルショップを経営するなど、フィ

被災直後は支援物資が集まるものの、時間が経過するに従い、まだ十分な復興を果たしていないとも支援が少なくなる。このようなケースは東日本大震災でも言えることであり、決して遠い国の話では済まされない。今回のプロジェクトの真意は、まだこの地に支援が必要だということ各地に広め、止まっていた

二輪業界における支援活動と今後

支援活動を再開してもらおうとこちらにある。ハーレーの団体が活動し目立ったことで、その効果は確かに高まったのではないだろうか。実際にこの活動内容は、日本リザルトを通じて、自民党オートバイ議員連盟会長である、逢沢一郎衆議院議員に報告され、今後の被災地支援における議連の協力が約束されている。

最後に五十嵐社長は、今後の展開について次のように述べた。
「日本においても、災害時に機動性を活かした働きが可能なオートバイをもっと有効活用できる仕組みを作っていくかなければならない。今後は行政とタイアップすることで活動の幅を広げ、次のステップに進めればと考えています。これは二輪の普及、そして業界の発展にも役立つことだと確信しています」



支給は混乱を避けるためにチケット制になっていた。開始前から多くの人が集まっており、支給開始と共にその数は倍増。住民がいかにこの支援を心待ちにしていたかが伺える（写真上）

は口々に「サンキュー」「アリガトウ」と感謝を伝えていた。ポカリスエットは健康飲料として現地でも知られているが、高価でなかなか手に入らないため、非常に喜ばれるという。村には子供の姿も多く見られ、配布されたポカリスエットを抱え、満面の笑みを浮かべている姿が印象的であった。物資を配り終えた五十嵐社長は、今回の活動について次のように語った。
「このような活動は、個人の力

ではできないことです。今回は日本リザルトさんの声掛けにより、様々な企業が協力してくれました。そして、それぞれが得意分野を活かすことで、プロジェクトとして今までと全く異なったものになったのです。また声が掛ければ、フィリピンに限らずこういった活動を続けていこうと考えています。バイク業界でも、賛同して頂ける企業やショップがあれば、ぜひ協力して頂きたいですね」



握手を求める住民と、それに笑顔で答える白須代表



五十嵐社長も率先して支給を手伝う



その場でポカリスエットを飲む子供の姿も



セブ島に関しては、この後、全日空から提供されている機内毛布9000枚を同様に配布する計画。今後も積極的に支援していく考えだ。

「ポカリスエット&ハーレープロジェクト」に参加した日本リザルトと各企業、そしてセブ島のハーレーオーナーズグループメンバー（写真右）